

# 言語文化と国際英語教育

塚 脇 真 由

## はじめに

今日、国際語としての英語教育は世界中で注目をあびている。国際化がますます進む社会において英語は重要で欠かせないコミュニケーション・ツールになっている。もはや英語を無視して社会で生きていくのは困難なほど英語は私たちの生活に密着したものになっている。そのような社会の中で英語を早く確実に身につけることが重要とされている。日本においても英語教育は常に注目を集め、賛否両論ある中、文部科学省は小学校への早期外国語教育（実質的には英語教育）の導入を決定した。早いうちから英語に触れることで英語への抵抗感をなくし、すんなり英語を用いることができる人をつくる教育を推し進めようとしているのである。本稿では、今日英語が国際英語としてどのような位置づけにあるかということについて考え、言語と文化の関係についてのこれまでの研究を検討することから、これからの英語教育が目指すべき方向性について考察したい。

## 1. 国際英語（E I L）とは

今日の国際英語の位置づけというものはどのようなものであろうか。モナッシュ大学の言語・文化・言語学部の准教授である Sharifian は国際英語を次のように論じている。

In general, we can say that English as an International Language refers to a paradigm for thinking, research and practice. ...EIL ... rejects the idea of any particular variety being selected as a *lingua franca* for international communi-

cation. EIL emphasizes that English, with its many varieties, is a language of international, and therefore *intercultural*, communication.

(Sharifian 2009a : 2)

EIL (English as an International Language 国際言語としての英語=国際英語)は多様性をもつ英語が、国際的でそれゆえ異文化間 (intercultural) のコミュニケーションの言語であるということを強調している。すなわち EIL は国際コミュニケーションのための言語であり、思考・研究・実務のパラダイムに関係するものである。EIL は、アメリカ英語やイギリス英語、カナダ英語のみならず、日本英語、イタリア英語、中国英語といった様々な英語が存在する中で、特定の英語を国際共通語として選んで、それを国際コミュニケーションの手段として使用するという考えを拒絶するものであり、これまで行われてきたような英米語をモデルにした英語ではなく、多様性を許容する英語であるということが強調されている。

次に今日の英語の使用状況について取り上げる。次の引用文の中で Sharifian が紹介しているように、イリノイ大学の言語学、国際言語としての英語分野の名誉教授である Kachru は、世界における英語の役割と使用を三つの同心円を用いて論じている。

Kachru (e. g. 1986, 1992) described the role and use of English around the world using a model that has three concentric circles: Inner-Circle, Outer-Circle and Expanding-Circle countries. In Inner-Circle countries, English is used as the primary language, such as in the United Kingdom, the United States, Australia and Canada. Countries located in the Outer Circle are multi-lingual and use English as a second language, such as India and Singapore. In Expanding-Circle countries, the largest circle, English is learned as a foreign language, such as in China, Japan, Korea and Egypt.

(Sharifian 2009a : 3)

Kachru はこの論をさらに詳しく Kachru (2008) においても論じている。Kachru の論をまとめると、表 1 と図 1 になる。

Types of concentric circle	The role of English	Areas
Inner-Circle	Primary language 第一言語 母語	UK, USA, Australia, Canada. etc
Outer-Circle	Second language 第二言語 公用語	India, Singapore. etc
Expanding-Circle	Foreign language 外国語	China, Japan, Korea, Egypt. etc

表 1. Kachru (2008) による世界の英語のモデル

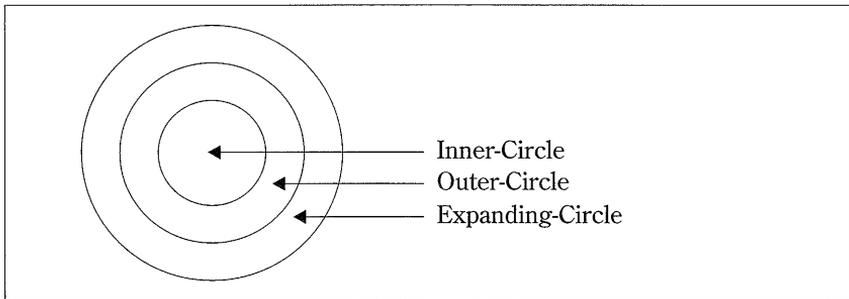


図 1. Kachru (2008) の英語の使用と役割を示す三つの同心円

まず、Inner-Circle には、英語の伝統的な基盤であるイギリス・アイルランド・アメリカといった国々と、ゆるく、歴史的に主に白人が多く住んでいる旧植民地であるオーストラリア・ニュージーランド・カナダが含まれる。これらの国々の人々の母語は英語であって、これらの国々において、英語は「母語」という「第一言語」としての役割を果たしている。次に Outer-Circle には英語が公用語である国が入る。これらの地域では、英語は民族間および言語グループ間で役に立つリング・フランカとして用いられ、高等教育・議会・司法・国際貿易・その他諸々の事柄は、主に英語を媒介言語として行われている。すなわち英語は「第二言語」として使用されている。最後に、もっとも大きな Expanding-Circle には英語に公的な役割がなく、英語を外国語とし

て学習している人々の国があてはまる。日本や中国、韓国やエジプトといった国がこの Expanding-Circle に当てはまることになる。このように Kachru は三つの同心円を用いて、世界における英語の役割と使用を論じた。

次に、それぞれの英語の使用と役割における問題点について考察する。Kachru は英語の使用と役割を示す三つの分類に基づいてそれぞれのサークルにおける問題点を次のように指摘している。

Within the Inner Circle, the debates are in relation to immersion in English vs. bilingual education leading to maintenance of primary language of the immigrant groups, and putting immigrant children in ESL (English as a Second Language) vs. mainstream classes in the USA, UK, Australia, Canada and New Zealand. In the Outer and Expanding Circles, arguments rage<sup>[sic]</sup> about mother tongue vs. “other” tongue education, methodologies, appropriate textbooks, and models of English to be used in educational settings. In the Expanding Circle, the external models, especially American and British English still continue to enjoy their favored status. (Kachru 2008 : 179)

まず Inner-Circle においては、移民グループの第一言語を保護するバイリンガル教育にするのか英語でのイマージョン教育にするのかという問題が存在する。イマージョンとは「浸す」という意味の英語で、実用的な外国語の習得のために、週当たりの授業数の大半を外国語で行って英語「浸け」にする教育をさしている。すなわち、ここでは移民の子どもを ESL (English as Second Language) 教室に入れるのか、Mainstream (主流) クラスに入れるのかといった対立がある。一方、Outer-Circle や Expanding-Circle においては、議論は「母語」対「母語以外の言語」の教育ということになる。とくに Expanding-Circle においては、外界モデルとして特にアメリカ英語やイギリス英語が優位な地位を維持してきた。すなわち Expanding-Circle に所属する人々には、Inner-Circle (英語や米語) を目指さなければいけないという考えが常に存在してきたのである。しかし既に見たように、EIL ではこれまでの英米語中心に基づいた英語ではなく、英語の多様性を大切にしながら、共通語として英

語を用いるという事が大切になってきている。

「多様な英語」は多様な文化と関係があるのではないかと考えられる。文化の相違は言語の相違とどのように関係しているのだろうか。

## 2. 言語と文化の関係性

同じ英語といっても日本英語・オーストラリア英語・アメリカ英語等の間には好まれる発音・文法等の言いまわしにおける相違があることを見ると、自然の条件や人々の生活習慣の相違するところでは言語の特徴も相違するらしいということが想定できる。

言語を使用する上で自然の条件や人々の生活習慣という文化は重要な役割を果たしているように思われる。それでは言語と文化の間には一体どのような関係があるのだろうか。ここでは、言語と文化の関係性について考察したい。言語と文化の関係性についての研究には長い歴史があるが、最もよく知られている研究は Humboldt (1767-1835) からはじまるものである。

### i) Humboldt

言語は最も含蓄的・直観的に世界観から発生し、これを最も純粋に再現しかつ思想を最も容易に、抽象的に処理するように形成されるのであるが…他国語の習得ということは従って、従来の世界観 (Weltanschauung) において新しい立場を獲得することでなければならなかったし、また実際においてもある程度はそうである。  
(Humboldt 1836)

Humboldt は言語は世界観から発せられるといった言語的世界観を提唱した。したがって他言語の習得は新しい世界観をもつことになるという点において、言語と文化の関係性を認めた。

次に Weisgerber (1899-1985) は言語的中間世界という考え方を提唱した。言語的中間世界とは人間の心と世界の中に言語というフィルターがあって、そのフィルターを通して人間は世界を認識しているという見解である。私たちが世界をただ直接認識していると思っている時にも、無意識のうちに社会

的文化的な記号としての言語を通して世界を見ているということである。すなわち言語を社会的文化的な記号として捉えることにより、言語と文化の関係性を明確に認めた。

また文化人類学者である Boas (1858-1942) は次の引用で見られるように、言語を経験の選択的分類としてとらえた。

ii) Boas

It is obvious that an extended classification of experiences must underlie all articulate speech. (Boas 1911/1991 : 20)

It seems fairly evident that the selection of such simple terms must to a certain extent depend upon the chief interests of a people. (ibid. : 22)

Boas はまた上の第一の引用文に述べられているように、あらゆる分節的な言葉の根底には、広範囲な分類があることは明らかであること、そして第二の引用文に見られるように、単一語を選択するという事はある程度、民族の主要な関心によるものであるということでは明らかであると論じた。すなわち言語というものはその民族の「経験と関心」という思考を反映するという事を認めたのである。Boas は言語と思考の関係性や言語が経験の選択的分類であるという事を認めている。

Boas の影響を受けた Sapir (1884-1939) は人類学者というよりはむしろ、言語学者としてその研究を継承し、言語と思考の関係性を「思考の溝 (thought groove)」という概念を用いて論じた。

iii) Sapir

Language and our thought-grooves are inextricably interrelated, are, in a sense, one and the same. The latent content of all languages is the same — the intuitive science of experience. (Sapir 1921 : 217)

It goes without saying that the mere content of language is intimately related to culture. In the sense that the vocabulary of a language more or less faith-

fully reflects the culture whose purposes it serves it is perfectly true that the history of language and the history of culture move along parallel lines.

(ibid. : 219)

Sapir は言語の潜在的内容は経験についての直観的知識であるとし、言語を使用することが特定の思考になりやすいということを論じた。言語と私たちの思考の溝は、密接不可分に絡み合っていて、ある意味では全く同一である。言語が決まった思考の溝を流れることで、特定言語に習慣的な思考をしやすいという事を述べている。また言語の内容は文化に密接に関係しているとし、ある言語の語彙は文化の目的を果たし、そういう語彙が多少とも忠実に文化を反映しているという意味において、言語史と文化史が平行線をたどるということを認めた。Sapir は語彙レベルにおいての言語と文化の関係性をみとめ、また習慣的な思考における言語の強い力を認めている。

このような言語と文化の関係性が認められていく中で、Whorf (1897-1941) は言語と文化のさらに強い関係性を認めた。

#### iv) Whorf

Concepts of "time" and "matter" are not given in substantially the same form by experience to all men but depend upon the nature of the language or languages through the use of which they have been developed. They do not depend so much upon ANY ONE SYSTEM (e. g., tense, or nouns) within the grammar as upon the ways of analyzing and reporting experience which have become fixed in the language as integrated "fashion of speaking" and which cut across the typical grammatical classifications, so that such a "fashion" may include lexical, morphological, syntactic, and otherwise systematically diverse means coordinated in a certain frame of consistency.

(Whorf 1941/1956 : 158)

Whorf は言語と文化のさらに強い関係性を認めた。「時間と物質の「概念」」は何か一つの文法組織 (例えば時制や名詞) に依存するというよりも、総合的な言い回し (fashion of speaking) として言語に定着しており、典型的な文

法的諸類別にまたがっている経験の分析と伝達の仕方に依存するものであるとした。「言いまわし」には枠組みとしてある一貫性を持った辞書的、形態的、統語論等の種々の組織的な方法が含まれている。

Whorf はまた Whorf (1956) において収録されていなかった “Yale Report” において次のように論じている。

In Eng the traditional “racy” talk of fishermen is doubtless source of division of fish-name nouns into 2 covert classes with markers (reactances) in the plural formation: 1. ‘economic fish’ (fish sought by fishermen), plural without s (trout, bass, cod, mackerel etc.), 2. ‘low-grade fish’, plural with s (sharks, skates, rays, bullheads, shiners etc.) including “queer” fish, (may be fished for but are not typical prized fish e. g. eels, flounders) . . . The native speaker of Eng will pluralize names of fish new to him in accordance with his sense of the cultural placement of the fish.

(“Yale Report” by Whorf in Lee 1996 : 267 – 268)

上の引用文において、Whorf は魚の例を用いて言語と文化の関係を論じている。英語話者は魚を「利益の上がる魚」と「下等な魚（奇妙な魚を含む）」に分類し、それによってその魚の複数形を変化させている。すなわち「利益の上がる魚」の場合、複数形には s を用いない。一方で「下等もしくは奇妙である魚」の場合、複数形には s を用いて表現する。そのため英語を母語とする人がはじめてみる魚に遭遇したとき、その人は無意識にその魚に対する英語を母語とする人の文化的な位置づけの感覚にしたがって、その魚の名前を複数形にするであろう。

Whorf は言語と文化の関係を次の引用文にみられるように定義したのである。

言語そのものが文化であり、言語と（言語以外の）文化はともに広義の文化というより大きな全体の本当に切り離せない部分をなしているという事実に基づくものである。

(See “Yale Report” by Whorf in Lee 1996 : 251 – 280)

Whorf は「言語そのものが文化である」と説き、言語と文化は切り離せないという事を認めた。言語と文化の関係性の研究の歴史の中で Whorf は、言語と文化の関係性をより密接不可分なものとして捉え、語彙と文法の区別を超えて「習慣的な言いまわし (fashion of speaking)」となった言語は文化であると捉えた。また言語化される以前のゲシュタルト的な知覚の可能性を認めたのも Whorf にとって特徴的である。このように言語と文化の関係性を認める度合いは確実に高まってきたのである。

さて今日の認知言語学者である Tomasello (1950-) は幼児の言語習得の過程における他者や環境との関係について、次のように述べている。

v) Tomasello

But at around 9–12 months of age a new set of behaviors begins to emerge that are not dyadic, like these early behaviors, but triadic in the sense that they involve infants coordinating their interactions with objects and people, resulting in a referential triangle of child, adult, and the object or event to which they share attention. Most often the term ‘joint attention’ has been used to characterize this whole complex of social skills and interactions. ...In short, it is at this age that infants for the first time begin to ‘tune in’ to the attention and behavior of adults on outside entities. (Tomasello 2003 : 95)

Tomasello の議論において注目すべき点は、幼児の言語習得の過程の観察から、幼児の言語習得は、生後九か月以降に出現する他者の意図を理解し、他者が第三者の対象に向ける注意を共有する能力、いわゆる共同注意 (joint attention) を基盤として進行すると主張した点である (9か月革命)。他者との相互作用や、言語使用者の意図の理解なしに、幼児の言語習得は不可能だと論じている。幼児は常に他者や、他者が作り出した文法的言いまわしに囲まれており、その中に存在する他者の意図を理解することによって、言語や文化を習得していく。子どもにとって真っ先に接する他者は親であり、親から子へすなわちおとなから子どもへと文化は継承されていくのである。このようにおとなの他者とのコミュニケーションを通じて、Tomasello は言語や

文化が「世代を超えて継承されていく」という点に注目し、言語の進化における文化的な役割に焦点を当てたのである。このようにして、Tomasello は言語の中に環境についての社会的解釈が織り込まれることに注目することによって、Whorf が述べた「言語そのものが文化である」という見解を結果的には継承することになったと見ることができる。

それでは、上の Tomasello からの引用文で述べられている共同注意はどのようなプロセスをたどるのであろうか。表 2 は共同注意のプロセスを示している。

1	視線追従 (gaze following)	おとなたちが見ているところをみる。 おとなの視線を追う。
2	協調行動 (joint engagement)	物体に媒介されたおとなとの相互作用をそれなりに長い間続ける。
3	社会的参照 (social referencing)	おとなを社会的な参照点として利用する。
4	模倣学習 (imitative learning)	おとなが対象に対してふるまうように、 子どもも対象に対してふるまう。

表 2. 共同注意 (joint attention) のプロセス

まず幼児はおとなたちが見ているところを見る、すなわちおとなの視線を追うといった視線追従 (gaze following) の行為をする。そして次に、対象に媒介されたおとなとの相互作用を一定期間続けることができるようになる。そしておとなを社会的な参照点 (social referencing) として利用するようになり、最終的に、おとなが対象に対してふるまうように子どもも対象に対してふるまうようになる。幼児はおとなとの間に共同注意フレームすなわちともに関心を向ける場所を確立し、そして相手の伝達意図を理解するようになり、最終的にはおとなの行為を模倣するようになるのである。子どもとおとなという二項ではなく、子どもとおとなと対象との間で成立する三項関係を子どもは理解するようになるのである。これはつまり相手の行為の意図や目

的を読み取り、それに基づいて行動するようになることを示している。これが子どもの社会化の始まりになるのである。このように幼児の言語の習得が生活の場面すなわち文化と結びついていることから、言語と文化の関係が証明される。

では幼児は具体的にはどのように言語を用いるようになるのだろうか。言語習得の初期段階において、子どもが最も頻繁に言葉と触れる場面は、子ども自身にとって、身近な場面や出来事であると言える。子ども自身が意図的におとなに注意を向けさせようとする行為としてまず子どもは「一語発話」をするようになる。一語文の例として次のようなものがあげられる。

・ Pick me up. → up      ・ I want more milk. → more

このように pick me up の up のみを発話したり、I want more milk の more のみを発話する事は子どもの言語処理上の負担という観点から説明づけられ、このような発話はボトルネック処理としてみなされる（児玉2009参照）。ボトルネックとはビンの首のあたりを指す用語で、ビンの首はビンの内部よりもせまくなっている。本来なら、子どもは発話する際、正しい語を検索し、他の語と結びつけ、正しい語順に配列しなければならないが、幼児にとってそれは過重の負荷になる。そのためそのなかのキーとなる一語を抜き出すわけである。このように統語上の欠陥はあっても、限られた語で文に相当する内容を伝えようとする試みがボトルネックなのである。

また、幼児の発話にとって語彙は大切な役割を果たす。子どもは自分の欲求を満たしてもらうために最低限必要な単語を習得する必要がある。そのため子どもは最も頻繁に使われる基礎的な単語から順に言語を獲得していくことになる。

さらに子どもはゲシュタルトつまり「かたまり」として言語を習得していくという点にも注目しなければならない。ゲシュタルトとはドイツ語で「形態」を意味する知覚心理学の概念である。ゲシュタルトとは、全体を分析せずに「ひとかたまり」の形態として捉えることであり、そこでは全体は部分の単なる総和（集合）ではなく、部分の総和以上の特性（機能や法則）を示

すということである。したがって、これは全体を部分に分解しようとする要素還元主義を否定する見方をさすことになる。子どもはある単語の連鎖が比較的大きな塊であったとしても、「子どもにとって扱いやすい単位」に分解し、それを全体として捉えている。このように表現を構成要素に分析するのではなく、表現全体をまるで一語文のように捉えるスタイルがゲシュタルト・スタイルである。例として wait a minute や wait for me を取り上げることにする。子どもは wait a minute や wait for me といった発話を頻繁にする。そのとき、子どもは wait の意味を理解するというよりは、wait が使用される状況において、wait a minute や wait for me といった表現が使用されることを経験し、表現全体をゲシュタルトとして使用することを学習していくと考えられる。つまり場面とともにゲシュタルトとしてまるで一語文のように子どもは上記のような一語文よりも比較的長い文を発話する事が出来るようになるのである。この場合、重要になってくるのが入力頻度である。たびたび待っていてほしいという状況の時に wait という言葉を聞くことで、子どもの発話に定着していくのである。このような場面が比較的起こらない場合、子どもにとって wait の習得は難しいものになるだろう。頻繁におけるといった頻度が言語入力の非常に重要なポイントになる。

このように言語習得の際には次の三つのポイントが重要な役割を果たしている。

1. 基本重要語句の習得
2. 場面とともに覚える
3. 慣用句、言いまわしをゲシュタルトとして覚える。

このように言語習得の過程からも、言語と文化が密接に関係していることがわかる。すなわち、基本重要語句の習得も、場面とともに覚えるということも、ゲシュタルトとして覚えるということもすべて言語を学ぶと同時にそ

の文化を学ぶということに繋がっている。このようにやはり言語と文化には密接な関係性があり、ある意味では一体なのであるという事がわかる。

### 3. 英語教育の目指すべきもの

2において取り上げた言語と文化の密接な関係性を認めた上で、これからの英語教育はどのようなものを目指すべきなのだろうか。Sapir は国際補助言語として求められている言語の条件を三つあげた。

What is needed above all is a language that is as simple, as regular, as logical, as rich, and as creative as possible; a language which starts with a minimum of demands on the learning capacity of the normal individual and can do the maximum amount of work; which is to serve as a sort of logical touchstone to all national languages and as the standard medium of translation.

(Sapir 1931 : 113)

すなわち、Sapir が国際言語に求める条件をまとめると表3のようになる。

1	可能な限り簡潔で、規則的、論理的であり、表現力が豊かで、創造的な言語であること
2	通常の個人には最小の学習能力しか要求せず、しかも最大の仕事量をこなす言語であること
3	全ての国語に対して一種の論理的基準となると同時に翻訳の標準的媒体となる言語であること

表3. サピアによる国際補助言語として求められる言語の三つの条件

このように国際言語になる為にはいかなる文化を持つ人にもアプローチしやすいような普遍性の高い言語が求められるということを Sapir は提唱したのである。

では私たちはこれからどのような英語教育を目指すべきなのであろうか。

もちろん英語教育と国際英語教育は同等に扱うことは出来ない。今日求められている国際英語教育は特に Speaking や Listening に重きを置いているが、そういったことのみ焦點を当てると Reading や Writing といった Grammar が置き去りにされてしまう可能性があるためである。また多様な英語を認める国際英語教育を基盤とすると、現在の英語教育における到達度の評価が困難になることから、英語学習者の動機づけの低下に繋がる恐れもある。また英語の Speaking や Listening に重心を置くなら、教師は英語のネイティブスピーカーのみでいいということになってしまうが、実際の英語教育ではそうではない。すべてにおいてバランスというものが重要なのである。また学習者一人一人にあった英語教育というものが求められていくのである。

しかしながら社会が意思疎通の手段として EIL（国際言語としての英語）を求めていることも事実である。EIL は多様な文化を持つ人が使用するため、ある程度スタンダード（標準的）なものになるだろう。国際英語として生き残るものと生き残らないものは Sapir の Drift（駆流）で説明されうるだろう。

The linguistic drift has direction. In other words, only those individual variations embody it or carry it which moves in a certain direction, just as only certain wave movements in the bay outline the tide. The drift of a language is constituted by the unconscious selection on the part of its speakers of those individual variations that are cumulative in some special direction. This direction may be inferred, in the main, from the past history of the language.

(Sapir 1921 : 155)

Sapir は言語における drift とは、目には見えない大きな流れつまり方向性であるということを指摘している。drift は基本的に言語変化の理論であり、いかなるときもすべての言語は drift によって強力に決定づけられている。つまり drift は言語変化の方向性を決めるのである。drift による言語的变化は表面的には影響を受けるが、言語の根本的な構造（すなわちパターン）においては比較的影響を受けない。また drift は無意識的な感情によって支配されるため、言語の話手は言語における drift に無意識的である。

このように言語変化は常に drift による影響を受けているのである。したがって、国際英語として求められる英語の言語変化も常に drift における影響を受けることになるだろう。では国際英語として生き残るものと生き残らないものはどのようにして分化していくであろうか。例として次のような表現を取り上げてみよう。

Ex) I'm swamped with work. / I'm very busy at work.

どちらも「仕事で身動きが取れない。」という意味を表している。前半の *swamp* という単語は沼地という意味を持っており、沼にはまったのと同じように身動きが取れないということを表現している。一方後者の表現は、*very busy* と言うことにより、仕事が忙しいと言うことを伝えている。前者は比喩的な表現、後者は明示的な表現ということになる。前者の表現では「沼」をイメージすることが出来ないような国々の人、例えばサウジアラビアの人々にとって理解が困難になるということが報告されている (Sharifian 2009: 200 参照)。他方、後者の「とても忙しい」と言う直接的な表現は誰にとっても理解可能である。したがって、*I'm swamped with work.* という比喩的表現よりも、*I'm very busy at work.* という直接的な表現のほうに drift は向かうであろうと分析することが出来る。

次にイディオムについて取り上げることにする。

Ex) from dawn to dusk / all day

上の表現はどちらも一日中ということの意味しているが、前半の表現は「夜明けから夕暮れまで」つまりは日が昇ってから日が落ちるまでと言う表現をすることにより「一日中」と言うことをあらわしている。一方 *all day* はシンプルな表現で「一日中」を表現している。白夜のある地域などを考えると、各々の国において「一日」と言う時間の捉え方はさまざまであり、前半の表現における一日の捉え方がすべての国の一日の捉え方に当てはまるわけでは

ない。しかしどの国においても、一日と言う単位が存在することは明白な事実である。したがって、英語独特のイディオムである前半の *from dawn to dusk* よりも、基準的な後半の *all day* のほうに *drift* は向かっているのではないかと分析することが出来る。

EILとして残るものと残らないであろうものを予測してみると、その *drift* の特徴としていくつかのことが想定できる。それらをまとめてみると表4のようになる。

残るもの	一般的、経済的、普遍的、「基本レベル」的なもの
消えていくもの	複雑、例外的、特定文化の特質についての比喩的ないいまわし

表4. EILにおける Drift

EILはさまざまな文化的背景を持つ人が使うため、その表現は出来るだけシンプル（経済的）で普遍的（どこにでもある）「基本的レベル」（子どもが最初に習得し、よく用いられる表現）にある表現で基準的、一般的なものにならないといけない。さまざまな文化の人が利用するEILはすべての人にとってfairに作用しなければならない。英語を母語として使用するInner-Circleの人でもOuter-CircleやExpanding-CircleのEILを理解することが当然要求されることになる。様々な文化にある人々によって用いられるEILでは、例えばアメリカ英語というような特定文化の英語と相違する英語も、同じEILの条件によって解釈されべきなのである。EILはこれからますますgeneralization（一般化）が進んでいけだろ。そのため英語教育においても、そのような視点を大切にして英語と親しんでいくことが大切であると思われる。母語を大切にしながら、意思疎通の手段として英語を学習するという姿勢がこれからますます求められていけだろ。

## おわりに

国際化がますます進む社会の中で、世界の共通語として英語を使用する動きが高まっている。国際言語としての英語 EIL はこれまでの英米語中心に基づいた英語ではなく、それぞれの文化の相違を視野に入れた共通語として英語を使用することを目的としている。言語と文化は密接不可分に絡み合っており、ある意味では一体であると考えられる。それぞれの文化を大切にするために、複数のものの見方をもつという事が求められているのである。お互いの文化の相違を尊重した上で共通語として英語を使用するといった理念に基づいた英語教育がこれからますます求められることになるだろう。

本稿は、京都女子大学英文学会2009年度大会（2009年10月31日）における発表原稿に加筆、修正を施したものである。

## References

- Boas, Franz (1911/1991) (Introduction to) *Handbook of American Indian Languages*. Lincoln: Univ. of Nebraska Press.
- Humboldt, Wilhelm von. (Tr. by Okada). 1948. *Gengo to Ningen*. Tokyo: Sōgensya.
- Kachru, Yamuna and Larry E. Smith (2008) "Cultures, Contexts, and World Englishes". London: Routledge.
- Kodama, Kazuhiro and Nozawa Hajime (2009) *Gengo Shūtoku to Yōhō Kiban Moderu: Ninchi Gengo Shūtokuron no Apurōchi*, ed. by Yamanashi, Masaaki. Tokyo: Kenkyūsha.
- Lee, Penny (1996) *The Whorf Theory Complex: A critical Reconstruction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Mandelbaum, D. G. (ed.) (1949) *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*. Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press.
- Sapir, Edward (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt Brace & Company.
- (1931) "The function of an international auxiliary language" *Psyche*, 11 in D. G. Mandelbaum (1949: 110–121).
- Sharifian, Farzad (2009a) *English as an International Language Perspective and Pedagogical Issues*. Bristol: Multilingual Matters.
- (2009b) "English as an International Language: an Overview" in Farzad Sharifian ed.

(2009a).

Tomasello, Michael (2003) “On the Different Origins of Symbols and Grammar” in *Language Evolution*, ed. by M. H. Christiansen and S. Kirby. Oxford University Press.

Whorf, Benjamin Lee (1956) *Language Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, Mass.: The M. I. T. Press.

—— (1979) “Benjamin Whorf Papers” in microfilm, in Penny Lee (1996 : 251 – 280).